

エルンスト・カッシーラー

数概念の言語的発達

永野 芳郎 訳

訳者まえがき

この表題のものは、Ernst Cassirer, “Die sprachliche Entwicklung des Zahlbegriffs” という一節の邦訳である。これはカッシーラーの大著『象徴形式の哲学』第1巻『言語』(*Philosophie der symbolischen Formen, Band 1: Die Sprache*, 1923)の第3章の一部を構成する。

著者は旧ドイツ領で、現在はポーランドの都市ブレスラウ（ポーランド名はヴロツワフ）で1874年7月に生れ、アメリカのニュー・ヨークで1945年4月に没した。彼はドイツの大学で教育をうけたが、最も強い影響をうけたのはマールブルク大学で、新カント学派の創始者ヘルマン・コーエンからであった。その後彼はベルリン大学で私講師、第1次大戦中は公務員を経て、1919年にはハンブルク大学の哲学教授に任じられた。1930年までこの大学の総長をつとめた。しかしヒトラーがナチス政権をとるや、ユダヤ系ドイツ人であった彼はその迫害をのがれるために、ドイツを去ることになった。イギリスのオックスフォード大学では1933年から2年間、スウェーデンのヨェテボリイ大学で同35年から6年間、アメリカのイェール大学では同41年から3年間、最後のコロンビア大学では同44年から1年間教壇に立った。

さて彼の哲学はカントから出発したが、人間の概念が世界を把握する様式に関しては、カントの基本原理を拡大する。初期の重要な業績である『実体概念と関数概念』(*Substanzbegriff und Funktionsbegriff*, 1910)では、彼は

概念構成について論じた。彼によると、人間知識を形成する具としての概念は、個別的事象の把握以前に存在するという。そして遂に3部作の大著『象徴形式の哲学』（1923-29）において、彼は概念なるものを単に認識のみならず、具体的な形式として読みとろうとするに至った。すなわち第1巻では言語、第2巻では神話、そして第3巻では認識について、博大な知識を駆使しつつ、人間文化のあらゆる発現の基礎となっている、精神の機能と心像とを検証した。カッシーラーは人間の精神活動の究極的原理として、象徴（あるいは記号化）の機能をもとめ、これを自己の哲学体系の中心に据えた。このようにして言語、神話、宗教さらには芸術をも象徴形式として把えようとする、そして最終的には人間の文化そのものの理解に到達しようとする—これが彼の中心思想であった。

訳者がこの大著の一端に接することができたのは、京都大学文学部の学生の時であった。心理学の矢田部達郎教授の流暢な意識を通して、言語に深い関心を抱いていた当時の若輩にとっては、特に第1巻『言語』はこの上なく感銘的であったことを思い出す。それ以来、訳者も言語関係の仕事は何度となくするようになったが、その昔受けた強い影響は著作の端々にいろんな形で現れている。同様に訳者の学生時代に大きな感化をもたらした言語学者・思想家はドイツのヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt 1767-1835）であった。カッシーラーの『言語』を読んで行くうちに、彼がフンボルトの良き理解者であることがわかった。前者の象徴形式は後者の説くところの「内的言語形式」（die innere Sprachform）と、重なり合う部分が少なくないのである。『言語』では約10頁がフンボルトについて当てられている程である。訳者がこの書物の中の一部ではあるが、カッシーラーの思想がよく現れている表題のものを、邦訳することを思い立ったのは最近のことである。本年1995年は丁度原著者の没後50年目に当たる。このささやかな訳業が、それを記念することができれば幸いであると思う。なお本文中
[]内の記述は訳者による。

*

*

*

空間の表象から時間のそれへ、そして両者からさらに数の表象へと進む際に、直観の円はそこではじめて完成するかに見えるが、それと同時に新しく一步ふみ出すごとに、この円をこえた彼方を目ざしていることがわかる。というのは把握可能な形式の世界が、このように進むごとにますます後退し、代って一つの新しい世界、つまり知的原理の世界が徐々に抬頭するからである。こうした意味で、数の本質はその真の哲学的、学問的発見者であるピュタゴラス学派の人々によって確認された。ピュタゴラスがその原理を演繹的に (*ἀνωθεν*) を探求し、その定理を非質料的かつ純概念的に (*ἀύλως καὶ νοερώς*) 表現することによって、幾何学をはじめて自由な学問の域にまで高めたことで、プロクロスは彼を賞讃する。その最初の創始者によって、学としての数学に刻印された普遍的傾向は、それ以来ますます強められ、深められた。これはプラトーン、デカルトおよびライプニッツにより、近代数学へと伝達された。そして幾何学と解析学を一つの原理で形成しようと試みる点で、現代の解釈は古代数学以上に、その真の中心としての数概念にひきもどされていることがわかる。しかも数学の概念的な、あらゆる基礎研究は、この中心点にますます明確に向っているのである。19世紀の数学では、数概念の論理的、自律的な形式に到達しようとする努力が次第に一般的にあらわれる。この目的はデーデキントとラッセル、フレーゲとヒルベルトによって、様々な方法で追求される。ラッセルは数のすべての根本的要素を、純粹に「論理的な定数」(*logische Konstante*) に還元しようとした。フレーゲは数を一つの属性と見るが、これはそれ自体非感性的ではあるが、非感性的な内容に付着し、物 (*Ding*) の属性というよりはむしろ、純粹概念の属性となるごときものである。数概念の基礎設定と導出では、直観的な関係とのいかなる結びつきや、測定できる数量のいかなる介入も、デーデキントによって厳密に、断固として排斥された。すなわち数の領域は空間や時間の直観にもとづくべきではなく、それとは逆に「純粹思考法則の直接の発露」(*ein unmittelbarer Ausfluß der reinen Denkgesetze*) である数概念は、空間的なものや時間的なものについて、真に厳密で精確な概念をはじめて我々に獲

得させうるものであるという。精神は測定可能な数量をまったく表象することなく、単純な思考手段という究極の方法で、純粹に連続的な数の領域を創造しようと努めるが、この必要手段によってはじめて、連続的な空間表象が明確なものとなりうるのである。数の理解にとって最初の前提条件があるならんらかの既与の事物にではなくて、思考の真の法則性に関係するという洞察から出発しつつ、批判的論理学は精密科学そのものに根ざした、そうしたあらゆる努力からその結論をひき出すのである。「事物から数を導き出すことは、もし導出を論拠に理解するならば、明らかに循環論法である。というのは事物の概念は複雑なもので、数はその不可欠な要素の一つとして、この概念に入りこむからである。数の根拠として主張されうるようないかなるものも、まさしくこの関係の措定 (Beziehungssetzen) をふくむことになり、数の根拠としてしか現れえない。何となれば、それは前提としてこの真の根拠、すなわち関係の措定をふくむことになるからである」とナトルプは力説する。¹⁾

しかし「純粹な」科学的思考がこの根拠に立ち、感覚や直覚のあらゆる支援を意識的に放棄すればするほど、それにもかかわらず依然として、言語の環と言語的概念構成に束縛されるように思われる。言語と思考の相互のきずなは、数概念の論理的、言語的発達において再現する。しかもそれはこの場合、おそらく最も明瞭かつ特徴的な表現を保持するであろう。数を言語記号に形成することではじめて、その純粹な概念の本質を把握する道が開けてくる。そこで言語が創造する数記号は、純粹数学が「数」として規定する組織の一面に対しては、不可欠の前提となる。しかし他の面、いうまでもなく言語記号と純粹な知的記号との間には、不可避な緊張状態と、決して完全に融和できない対立が存続する。言語が後者にはじめは道を拓くとしても、最後までこの道を通過することはできない。純粹数概念の措定可能性の基となる「関係的思考」(beziehentliches Denken) という形式は、みずからに最終目標を設けて、たえず発展しながらそれに接近するが、その本来の領域内では完全にそれに到達することはもはやできない。なぜなら数学的思考が数概念に要求する、まさに決定的な一步——直覚および直覚的な事物表象の基礎

からの独自の決別と解放を、言語は成就できないからである。言語は具体的な事物や過程の表現に固執し、純粋な関係性の表現を間接的に形成しようとする場合でも、依然としてそこに束縛されたままである。しかしここでもまた同様に、発展の弁証法的原理が実際にあてはまる。言語はその発展途上で、感性的なものの表象に深く埋没すればするほど、ますます感性的なものからの知的解放の手段となる。言語が質料的に計数可能なものに向って発展し、はじめはきわめて感性的、具体的そして限られたものと受けとられようとも、この新しい形式と新しい思考力は数の中にふくまれて存在するのである。

しかしこの形式は一つのまとまった全体として、ただちに登場するのではなくて、はじめはその個々の要素から徐々に出現しなければならない。とはいえ数概念の言語的起源と形成の観察が、論理的に分析できる課業がまさにここに存するのである。その論理的内容と起源からすれば、数は極めて多様な思考方法ならびに思考要求の浸透と相互作用に由来する。ここでは数多性の契機は単一性のそれに、分離の契機は結合のそれに、一般的な弁別性は純粋の等質性に移行する。数の精確な概念が形成されるためには、このようなすべての対立は真に知的な均衡状態におかれなくてはならぬ。この目標は言語にはいつまでも達成できない。それにもかかわらず、最後は数の精緻な組織に組みこまれる糸が、一本ずつ編み合わされ、論理的な全体を作りあげるまでに、細部において発展する経緯は言語ではっきりとたどることができる。こうした発達では種々の言語は様々に対処する。言語が解決し、特に優先的で大きな重要性を与える数ならびに多数の構成動機は多様である。しかし言語が数概念から獲得するところの、このすべて特殊な、ある点では一面的な見方の総体は、最後には比較の一つにまとまった全体を作りあげることになる。数概念の存在する精神的、知的な環を、言語はそれ自身では完全に達成しえないにしても、その環の周囲をとりかこみ、間接的にその内容と限界を定める準備はできる。

最も単純な空間関係の言語的把握で、我々が遭遇したのと同じ状況がこの場合にもあてはまる。ここからさらに進んで、感性的、直感的世界をこえて

拡大されるためには、数関係の区別は空間関係のそれと同じように、身体と手足から出発する。人体はどんな場合でも原始的な計数の基本型となる。「数えること」とは、ある何かの対象物を発見し、それが同時に数える者の身体に移行し、自身に可視的にさせて表す明瞭な弁別にほかならない。したがって、すべての数概念は語の概念になる以前は、まったく模倣的な手概念または身体概念なのである。計数の身振りは自立的な数詞に伴うだけの役目をするのではなく、いわばその意味と対象に融けこんでしまう。たとえばエーウェ族〔西アフリカ〕は指を伸ばして数える—左手の小指から始めて、右手の人差指で数えた指を折りたたむ。左手が終われば右手で順に同じことをする。次に再び最初から始めるか、または地面にしゃがんで足指を数える。²⁾ ヌーバ族〔アフリカ・スーダン〕では計数に殆どいつも伴う身振りは、1から始めるとき、まず左手の小指、薬指、中指、人差指そして最後に親指を右手のこぶしに押しつけ、次に同じ動作を手をかえて行うというものである。20の数では両手のこぶしは互いに水平に押しつけられる。³⁾ 同様にバカイリ族〔南米カリブ地方〕に関するフォン・デン・シュタイネンの報告によれば、数えられるもの、たとえば一つかみのトウモロコシの粒などが、じかに手に触れるところに差し出されていないならば、もっとも簡単な計数さえうまくゆかなかったとのことである—「右手でふれて……左手で数えた。右手の指を使わずに、左手の指にある粒をただ見るだけで数えることは全く不可能であった」。⁴⁾ この場合数えられる個々の物が、身体部分になんらかの具合に関係づけられるだけでは十分ではなくて、「数える」行為が進捗するには、それはいわばじかに身体部分と身体感覚に変換されなくてはならぬ、ということがわかるであろう。したがって数詞は対象物のなんらかの客観的限定ないしは関係性を示すというよりは、むしろ数えるという身体運動の指令がそれにふくまれているのである。数詞はその都度の手または指の構えに対する表現であり、指示でもあって、しばしば動詞の命令形で表される。だから、たとえばソト族〔南アフリカ〕では、5をあらわす語は実は「手を完結せよ」、6は文字どおり「飛べ」、つまり別の手に飛び移ることを意味する。⁵⁾ 数えら

れるものの類別、配置の仕方を特に示すことで、数表現をおこなう言語では、いわゆる「数詞」のこうした積極的な性格が特にはっきりと打ち出される。たとえばクマ族〔北アメリカ〕の言語は置く、横たえる、並べるといった動詞から作られ、数えられるものの特性にしたがって、特殊な配列法を示すその種の表現を豊富に駆使する。ある一群のものを数えるには、地面に広げなければならぬし、別の一群のものは積み重ねなければならぬし、また別のものでは堆積して分けねばならぬし、さらに他のものでは列に並べなければならぬ。だからこれらの物の各々決った置き方には、その特性に応じて種々の動詞状数詞、つまり「数の分類詞」(numeral classifier)が対応することになる。⁶⁾ この手順のために物を配列するときの動作は、ある一定順におこなうと考えられる体の動きと関連づけられる。その場合体の動きは手、足、指および足指だけに限られることなく、身体のほかのあらゆる部分にも及ぶ。ニュー・ギニアでは計算は左手の指から手首、ひじ、肩、うなじ、左胸、胸部全体、右胸、うなじの右側などにまで至る。また他の地域では腋、鎖骨のくぼみ、臍、鼻、目、耳などが使われる。

このような原始的計算法は、その知的価値の点でしばしば軽べつされてきた。たとえばシュタインタールはマンデ黒人〔西アフリカ〕の計算法について次のように述べている。「黒人の精神に対して重荷となっている罪はこうである——彼らは足指に達すると、この感覚的な支え〔足指〕から離れて、みずから自由に工夫して足指の数を足したり、指の短い連なりを長い連なりに拡大しようなどとはしなかった。あくまで身体に固執しつつ、あらゆる道具の中でも高尚で、精神の従者である手から、体の奴隷である、埃を引掻きまわした足の方に下りて行った。こうして数は一般に身体に固着したので、抽象的な数の表象とはならなかった。黒人は数を持たず、手足の指を全部合わせたものしか持たない。無限のものに対する欲求にかられて、常に特定の数をこえて、そこに1を加えるというのが彼らの精神ではなく、現前にある個々のもの、自然界の物が1から1へ、小指から親指へ、左手から右手へ、手から足へ、1人の人間から他の人間へと彼らを見ちびくのである。決して

意のままに創り出して、手出しすることなく、自然の中を這いまわるのである。彼らの計数は我々の精神がいとなむ行為ではない。⁷⁾しかしこの非難の言葉の半ば詩的で、半ば神学的な荘重さは次のことを忘れてしている。すなわち、この原始的な方法を、我々の十分に発達した数概念で測るかわりに、やはりそこに蔵されている乏しい知的内容を求め、認識することの方が、ここではより正しく実り多いものだということ。数概念のなんらかの体系とか、それを一般的な関連に取込むこととかが、勿論まだ重要ではないのである。しかしながら一つのことが達成される。つまり多様性がたとえ内容的に、真に感性的に規定されたとしても、それが貫かれるときは、一部分から他の部分への一連の移行という極めて明確な順序が守られるということである。計数動作では体の一部分から他の部分へと、任意に進むわけではなくて、確かに習慣的に選ばれてはいるが、この選択にしたがって確立された連続の図式どおりに、右手が左手の次、足が手の次、うなじ、胸、肩が両手、両足の次というように順序がある。このような図式の設定は発達した思考が、「数」として理解しているものの内容を論じつくすこととは程遠いにもかかわらず、不可欠な前提条件となる。というのは純粋な数学上の数もまた究極的には、位置体系の概念、つまりウィリアム・ハミルトンの名づけたような「連続の順序」(order in progress) という概念に帰するからである。この場合、原始的な計数法の決定的な欠陥は、たしかに次の点にあると思われる—それがこの順序を知的原理にしたがって、自由に創造することをせず、もっぱら既与の物、特に数える者みずからの手足の動きに依存していることである。しかしこの行為の紛れもない消極性においてすら、まだ芽ばえとしてしか見られぬ、特徴的な自発性が働いている。精神は感性的なものが個別的、直接的に存在することにただ応じるだけでなく、それがどのように配列されるか、把握されるかにしたがって、対象物の規定から行為の規定へと前進しはじめる。そしてこの後者、結合と分離の行為において、最後に出現するのが数構成の固有な、新しい「知的」原理である。

しかしさしあたり、あるものから別のものへの移行において、移行連続の

順序を保持する能力は、ただ孤立的な要因であるにとどまり、真の数概念に必要な他の契機とはまだ結合、調和していない。数表現として機能する人体の部分と、数えられる物との間には、実はある並立関係が存在する。しかしこの関係は長い間きわめて曖昧な性質をもち、引き合わせられた順序を区分して、明瞭な単位に分けることが首尾よく行かぬので、いうならば「何もかもひっくるめた」並立関係でとどまる。とはいえ、この種の単位設定にとって重要な前提条件は次の点にあるだろう——数えられる要素が厳密に同質的なものと見なされること。したがって、他の感性的、物質的特徴とか属性によらずに、それが数えられる際の位置そのものによって、各要素がたがいに識別されること。しかし我々はさし当っては、このような等質性 (Homogenität) の抽象作用から、まだ遠くへだたっている。数えられるものが直接触れ感じられるためには、確実に手でさわられるように現前していなくてはならぬばかりか、計算時の単位そのものが、完全に具体的、感性的な弁別性を示してはじめて互いに区別をつくものでなければならぬ。純粹に概念的に等質な位置単位の代りに、人体の自然な手足運動が呈するような、自然の物的単位しかここには存在しない。原始的な算数はその要因として、このような自然物の集群しか知らない。その方法はこの物的に与えられた物差しによって様々に区別される。計算のモデルとしての手を使うことから5進法が、両手を使えば10進法が、両手両足を合わせると20進法がそれぞれ生れる。このほかに、集群化や組織化に至る、最も単純なこの種の手始めよりも劣った計算法もある。それでも「計算」のこの限界は、具体的な多とその区別を把握するときの限界と同じに受けとめるべきではない。本来の計数が最初の未熟な段階をこえて進んでいない場合でも、この多の区別は大変精緻に発展することがある。というのは多が区分配列され、「単一の多」として量的に規定されるということではなく、それぞれの特殊な多には質的な総体特徴 (Gesamtmerkmal) が付着して、その区別が認識され、その特色が理解されるというだけで十分だからである。計数能力がとても不完全にしか発達していないアビポン族 [南アメリカ] に関して、それでもなお具体的な総体の

識別能力が、彼らには大変精巧に発達していることが報告された。彼らが狩に連れて行く多数の犬の群のうち、出発時に一頭だけ見当らぬときは、彼らは直ちにそれに気づいた。そして400か500頭の牛の群の所有者も、群が家の方に追いたてられて行くときに、群の中に数頭がいないか、またその中のどのような牛がいないかを、遠くからでも気づいたということである。⁸⁾ ここには特殊な個別的徴表によって、認識され、区別される個別的な多がある。概して「数」という言葉であらわされる限り、多「数」がここに出現する。といっても、特定の、計測された「数の大きさ」(Zahlgröße)の形でではなくて、一種の具体的な「数の形態」(Zahlgestalt)として、さし当り多数というにはまだ十分に分化していない総体印象に付着した、一種の直観的性質として現れるのである。

言語はどのような任意の、計数可能なものにもあてはまる、全く一般的な数表現を本来は知らないが、特殊な類のものに対しては、特殊でそれに応じた数の表示を用いるという、この基本的な見解は言語に大変明瞭に反映している。数がまだ専ら物の数としてうけとられている限りは、基本的に様々な物の類と同数の種々の数と数群が存在するはずである。多数物をあらわす数が、空間的な形態とか何かの感性的な特質と同じように、物に附着した質的属性としてしか考えられぬとすれば、数を他の属性から切り離し、これに普遍妥当な表現形式を創造する可能性は言語にはなくなるであろう。数の表示法が物および属性の表示法とじかに融合している状態は、言語構成の原初段階で実際にみとめられる。この場合同じ内容の表現法が、数の設定と数の特徴の表現としても、また物の性質の表現としても、役立っているのである。ある特定の種類の物と、この物の特殊な群属性とを同時にあらわすような語がある。たとえばフィジー諸島〔南太平洋〕の言語では、2, 10, 100, 1000個のココナツの群や、10隻のカヌー、10匹の魚などをあらわすのに、それぞれ特別の語が使われる。⁹⁾ そして数の表示が物と属性の表示から分離してしまったあとでも、それはできるだけ物と属性の多様性になお密着しようとする。といっても、どの数もどの物に適用されるわけではない。という

のは数の意味はまだ抽象的数多性を表すことにあるのではなくて、多の様式、種類および形態を表すことにあるからである。たとえばアメリカ原住民族の言語では、人や物、有生のものや無生のものが数えられる場合、それぞれに応じて種々の数詞が用いられる。また魚や獣の皮を数えたり、立っているもの、横たわっているもの、坐っているものなどを数えるとき、特別な表現が使われる。モアヌ地方〔ニュー・ジーランド〕島民はココナツ、人間、靈魂、動物、樹木、カヌー、村、家、棒、畑などを数えるとき、各々に対して1から9までの異なった数詞を用いる。英領コロンビアのツィムシアン語には、平たいもの、円いもの、動物、人間、舟、長いもの、時間、分量などを数えるときの特別な数系列がある。¹⁰⁾そして他の隣接諸言語では、種々の数系列の分化がさらに進んでいて、実際にはほとんど限りがない。ここでわかるように、計数の努力は「等質性」以外のすべてのものに対して払われているのである。種類別にあらわされる属性の相違に、量的な相違を従属させ、この後者の表現をそれに応じて変えるのが、むしろこのような言語の傾向である。またこの傾向がはっきり現れるのは、言語がすでに一般的な数表現の使用に向って前進したが、特別な集合的総括を一定の数多表現として示す特殊な限定詞 (Determinativ) を、なおも各表現に付着させている場合である。人間を一つの「集団に」、石を一つの「山」に集められるか、あるいは静止しているものの「列」というか、動いているものの「群」というかは、直観的、具体的にみれば、明らかに全く別のものである。言語は集合詞を選択して、規則的に使うときに、このような分類と意味の微差を保持しつつ、それによって本来の数詞とその種の語とを組合わせようとする。たとえばマライ・ポリネシア諸語では、数表現はそれに付随する名詞とは直接に結びつかず、その各々がいうならば特殊な「集合化」(Kollektivierung)をあらわす限定詞を名詞に加えなければならない。たとえば「馬・5尾」[=5頭の馬]、「石・4球」[=4箇の石]などのように。¹¹⁾同様にメキシコ原住民の言語では、卵や豆のように丸くて円筒状のものを表す場合、人、物、石堀、溝などの長い列を表す場合、それぞれに対して異なった標識が、数と数えられるものにつ

けられる。また日本語と中国語も、数えられるものの種類に応じて区別されるこの種の「計数詞」(Numerativ)の使用を、きわめて精緻に発達させている。単数と複数一般的な文法上の区別のない、これらの言語では、集合的総括そのものが、特定の性質にしたがって明瞭に特徴づけられるように、厳密に配慮されているのである。抽象的な計数の過程では、単位はたがいに結合されるまでは、その各々の内容が空白にされねばならぬけれども、この場合では内容は存続して、特定の総括を集合性、数多性として規定するようになる。言語的、概念的規定はここでは、群を再び単位や個に分解するというよりもむしろ、ある群の形を際立たせ、たがいに明確に区別する方向に向けられる。すなわち多の特徴そのものが、その直観的な総括内容によって把握され、他と区別されることで生じるのであって、論理的、数学的にそれが個々の構成要素から成立することで生じるのではない。言語が数詞構成で追求する手続きの代りに、「単数」と「複数」の形式的、一般的な区別を達成するときの手段を観察すると、我々は同じような基本的把握に行き当る。複数の観念には「多」の論理的、数学的範疇、したがって明確に分離した等質的単位から成る多の範疇が含まれていると考えれば、この意味で解される複数なるものは、多くの言語には全く存在しないことになる。単数と複数の対立を全然あらわさない言語は多い。名詞はこの場合その基本形からすれば、種属の個々の一例サンプルを表すのに役立つと同様、その一例の非限定的な多がふくまれる種属の表示としても用いられる。だからそれは単数と複数との中間に位置し、いわば両者の間でまだどちらともつかぬものである。この区別が重要と思われる特別な場合にだけ、特殊な言語手段で表されるが、この区別は往々にして複数というよりは、むしろ単数の意味を持たせられる。ミュラーによると、たとえばマライ・ポリネシア諸語は、「生命体の単位で多数を把握する範疇としての数概念には達していない」。だから名詞は実は具体的でもなく、抽象的でもなくて、その中間的存在である。「マライ人には「人」は具体化された (in concreto) 人でもなく、人=人類のように抽象化された (in abstracto) ものでもなくて、見て知っている人を意味する。しかし

この語 (orang 「人」) は我々の使う単数というよりは、複数に相当する。それゆえ単数は「1」を意味する語によって、はっきりと表さなければならぬ。¹²⁾ したがって、この場合は成語要素 (Formans) によって、多の意味に変換される単なる個別性はまだ概念化されていない。一方では名詞に一般的、集合的な意味を与えることによって複数の意味が、また他方では個別化の小辞を用いることによって、未分化の多から単数の意味が発展しうることになる。¹³⁾ 一と多に対する同様な見方は、また多くのアルタイ諸語の基調となっている。ここでは文法的に未分化の同一の語が、同時に一と多の表現として使われる。そのような普通名詞は一方では個々のものと種属全体を、他方では不特定数の個体をあらわすことができる。¹⁴⁾ しかし単数と複数の区別が明瞭に設けられている言語圏でも、比較的無関心な段階が、この厳密な区別に先行したことを明示する種々の現象が見られるのである。この際度々わかるように、複数の外的刻印をすでに有している語は、その文法構造からすれば、反対の (単数の) 意味で用いられるから、動詞の単数形と組合わされる。というのは、その本来の意味からすると、非連続の多というよりは、むしろ、集合的統括あるいは単一性と感じられるからである。印欧諸語では次のことが明らかになる。すなわち印欧祖語とギリシア語では、中性複数動詞の単数形と組合わされたことはよく知られている。中性名詞語尾 -a は本来何の複数的な意味をもたなかったが、集合的な抽象名詞を表すのに使われた単数・女性名詞語尾 -a に立ち戻った。だから -a で終る形はもともと複数でも単数でもなく、必要に応じてそのいずれにも受けとられる集合詞にほかならない。¹⁵⁾ また別の面で明らかになるのは——計数の過程で見られたことと類似するが——言語が複数構成の形式においても、突然に一と多の抽象的範疇を対立させることはしないで、両者の間に多様な移行段階を設けることである。言語において区別される最初の多は単なる多ではなく、特殊で顕著な質的性格をもった特定の多である。双数 (Dual) と三数 (Trial) とは別に、多くの言語は二重複数を区別している。つまり 2 および若干のものを表す限定的な複数と、多を表す広義の複数とである。ドブリツホフナーがア

ビポン族の言語について報告したこの用法は、セム諸語、たとえばアラビア語にもそれとそっくり相当するものがある。双数のほかに3から9までの限定的な複数と、10とそれ以上または不特定多数の複数をもつアラビア語のことを論じて、フンボルトはこう言っている。類概念をいわば数範疇外のものと見なし、語尾変化によってそれと単数、複数とを区別するこのような根本的な見方は「疑いもなくきわめて哲学的」と云わねばならぬだろうと。¹⁶⁾しかし実際は、類概念が種属の限定性にしがたって着想され、まさにこの限定性のために数の区別から遊離するのではなく、まだ類概念がこの区別の形式に全く入りこんでいないと思われるのである。言語が単数と複数を示す際の区別は、類にまで高められず、まだ完全には確定していない。一と多の量的対立は、さし当り確立されていないので、両者を包括する質的な単一性では解消されない。種属の単一は明らかに1を意味し、多とは対照をなす。多くの言語では非限定の集合的な意味から、単数と複数の意味が次第に顕著になるが、ここで不明確性が決定的要素となる。多は単なる堆積、集合、群として、しがたって論理的ではなく感性的な総体として把握される。その普遍性は個々の要素、成分にまだ分解されない印象のものであって、特殊なものが「分離してとり出されたもの」と解される、上位概念の普遍性ではない。

しかし多という単純な概念から、数という厳密な概念が生じるのは、まさにこの分離という根本的契機による。言語がこの概念に接近し、その特色に応じて感性的な外被で把握できる二つの方向を、我々は従来の考察で知るようになった。すなわち一方では、人体の諸部分にもとづいた、最も原始的な計数では、言語的思考はすでに「連続における秩序」という契機をしっかりと保持している。この計数法がなんらかの結果をみちびくのであれば、身体各部を勝手に次々と移動するようなことをせず、順番に何かの規則が守られるべきであろう。また他方では、言語を一般的な集合表象の形成へとみちびいたのは、まさしく多の印象、すなわちなんらかの具合に部分に分れた、まだ不明瞭な全体に対する意識であった。二つの場合、数の思考とその言語表現とは、直観の根本形式、つまり空間と時間の把握に結びついて現れる。数

概念の本質的な内容を明らかにするには、両形式がいかに協調しなければならぬかが、認識論的な分析によってわかる。数が「集合的なもの」(das kollektive Beisammen)を把握するのに、空間の直観に支えられるとしても、この直観の規定とは特徴的な対立契機、すなわち配分的な単位と個 (distributive Einheit und Einzelheit) の概念形成には、時間直観が必要となる。何となれば、数が二つの要求を満すのみならず、また両者を一体として把握することは、数が達成せねばならぬ知的な課題だからである。実際に数的に確定されたどの多も単位として、また同時にどの単位も多として考えられ、認識される。これらの対立契機の相関的統合は、意識のあらゆる根本活動において繰り返される。常に問題になるのは、意識の統合に入りこむ要素が、ここで単なる並置状態のままにされず、同じ基本活動の表現と結果として理解されることである。ところでこの二重の規定はとても重要であるが、問題の特殊性に応じて全体的総合では、二要素のうちどちらか一方が優位を主張することがある。精密な数学上の数概念では、総合と分析の働きの間には真の均衡状態が達成されるかにみえる。ここでは全体に総合しようとする要求と、諸要素に徹底的に分解しようとする要求とが、理想的な厳密さで満たされる。ところが空間と時間の意識では、この両契機のうちのどれかが優位を主張するのである。というのは空間の場合は、諸要素の並存と結合が、時間の場合はその継起と分離が各々優先的に表されるためである。特定の空間的な形態がその「中に」ふくまれる全体として、同時に空間を表象しないでは、それを直覚したり考えることはできない。この場合、形態の特定性は全てを包括し、分割できない空間の制限としてのみ可能である。他方、時間的な瞬間は連続の中の部分要素として、現れることによるのみそうあるのである。しかし各要素が諸他のすべてを排除し、単一で非分割の「今」、すなわちすべての過去と未来から絶対的に区別される純粹の現在点が設けられることによって、はじめてこの連続が構成されるのである。言語に表現されるような数の具体的思考は空間と時間の両意識の成果を活用する。こうして数の二つの異った契機を発展させる。空間的な対象物の区分から、言語は

集合的多数の概念と表現に達する。また時間的な行為の区分から、分離と個別化の表現に達する。複数構成の型には、このような二重の多の概念的把握が、明らかに刻印されているように見える。複数の構成は一方では物的複合体の直観によって、他方では一定の時間的経過の相の律動的、周期的回帰を直覚することから導かれるように思われる。別言すれば、それは多数の部分から成り立つ対象物の総体の方に特に向けられる一方、他方ではたがいに結合して連続的なものとなる現象や、活動の反復に対してもさし向けられる。実際、優勢に動詞的な構造を示す言語は、複数の特徴的な「配分法」を発達させたが、これは集合的な方法とはっきり区別される。動詞の働きを明瞭に際立たせ、特徴づけることは複数把握の真の手段となる。たとえばク라마ス族〔北アメリカ〕の言語は、個物と多物の表示を区別するのに、何の特別な手段も設けていないけれども、つぎのような区別を極めて厳密に、首尾一貫して守っている——一回の時間的活動で終わってしまう行為と、時間的には多様であるが、内容的には同種の行為との区別である。ガジェットはこう云っている。——「ク라마ス・インディアンの心にとっては、種々のものが様々の時にくり返し行われたり、同じことが何度もいろいろな人によってなされたりするということは、我々が自身の言語に持つような複数の純粹概念よりも、ずっと重要だと思われた。この分割性（Gesonderheit）の範疇は彼らにとっても強い印象を与えるので、彼らの言語は随所に特殊な象徴音の手段、つまり重複法（Doppelung, Reduplikation）によってそのことを表している。だから我々の意味するどのような「複数」の表現も、ク라마ス語では新しく生じたものである。それにひきかえ、行為を多くの同種の過程に分解するという思考は、重複法という定まった方法で、いつも厳密にはっきりと表されるのである。なおこの重複法は後置詞や、ある種の副詞的小辞に至るまで、この言語のすみずみまで行きわたっている」¹⁷⁾ アサバスカ語族〔北アメリカ〕に属するフパ語は、我々ならば複数を予期する場合、しばしば単数を用いる。すなわち一つの行為に複数の個人が関与していても、それが単一と見られる場合である。しかしここにおいても、配分関係は特殊な接頭辞をえ

らんで、非常に精密に表される。¹⁸⁾ アメリカ原住民族の言語以外でも、重複法は同じような機能をもつ。¹⁹⁾ そうした場合でもまた、本質的に抽象的な把握法が、その直接的、感性的な表現を言語に造り出したのである。音声の単純な反復は最も原始的で、効果的な手段であり、特に人間活動の律動的な反復や分節運動を表すのに向いている。我々は言語形成の最初の動機、ならびに言語と芸術との関係のあり方に対して——別にここでなくても——一べつを与えうるような場に多分立っているであろう。人間みずからの身体運動で感じたリズムが、はじめて外形化される人類最初の原始的な労働歌にまでさかのぼって、詩の起源を追求する試みがなされている。この種の労働歌が今なお世界中に普及していて、基本形式ではいかに似通っているかは、労働とリズムに関するビュッヒャーの広範な研究が示すところである。各種の肉体労働は個人のみならず、共同で行われた場合、運動の目的に合った調整を可能にするが、これはひいては律動的な組織化と、個々の労働の位相の律動的部分化にいたるものである。このリズムは意識に二通りに表される。つまり一方では純粹の運動知覚および筋肉の緊張と弛緩の交替という具合に、他方では聴覚による知覚ならびに労働に伴う物音という客観的な形で、それぞれ刻印されるのである。行為とその細分化の意識は、こうした感覚的な差異に結びつけられる。粉ひき、擦りつぶし、突く、引っばる、押す、踏みつける等の動作には、それぞれの目的に合った固有のリズムと音調が区別される。おびただしい種類の労働歌、たとえば紡ぎ、機織り、打穀、舟漕ぎ、粉ひき、製パン等々の歌では、労働の特徴で決まるある一定のリズム感覚が、同時に音声で客観化されてはじめて、維持され仕事に変換されるのであって、この経緯は今なお我々がじかに耳にするとわかることである。²⁰⁾ 律動的にくり返される数多くの相をふくむ行為を表すものとして、ある種の動詞重複法もまた、本来は人間自身の活動に端を発した、この種の客観化から生れたものであろう。いずれにせよ、言語が純粹な時間と数の形式の意識を獲得できたのは、意識を一定の内容、すなわち律動的な基本体験に結びつけ、そこで両形式が具体化され、融合されることによるしかなかったのである。ここで計数

の基本要素の一つとして、分割配分の出発点となったのは、物よりもむしろ動作の細分化であった。これは次のことによって確かめられるように思われる——多くの言語では動詞における複数表現は、実際に多くの行為者がいるときだけでなく、またただ一人の主体が同じ行為を様々な対象にさし向けるときにも使われることである。真の行為そのものに向けられる複数直観にとっては、その行為に一個人またはそれ以上が関与しているかどうかは、実際には二の次で、行為を個々の相に分解することが常に決定的な重要性をもつ。

これまで我々は純粹直観の基本形式である空間と時間の形式を、数ならびに多数の構成出発点と見てきたけれども、計数行為の根源的深層にはまだふれてはいない。というのは、ここでも考察は単に対象だけから、あるいは客観的な時空の圏内の相違からは出発できないので、純粹の主観性に起因する根本的対立に、また立ち戻らねばならぬからである。言語が達成する最初の計数に適した分割を、次のような領域から創造したことを証する徴候は数多い。つまり数意識が最初発展したのは、対象や過程の物的な並置、分離よりもむしろ、「我」と「汝」の分離からであったということである。単なる事物表象の領域よりも、この分野での方がずっと微妙な区別と、より強い感受性が「一」と「多」の区別に支配的であるかにみえる。本来の複数形を名詞にまだ発達させていなくても、そのことを人称代名詞に刻印している言語は多い。²¹⁾ また二つの異った複数表示を用いて、その一つを代名詞専用に行っている言語もある。無生物ではなく、人間のことが問題となる場合だけ、名詞の複数が表示されることがよくある。ヤクート語〔シベリア北東地方〕では衣服や身体部分は、一個人に二つないしそれ以上存在しても、通例は単数になるが、数人のものなら複数におかれる習わしである。²²⁾ 数の区別は単なる事物直観よりも、個人に対する直観の場合の方が、ずっと厳密に発達している。

しかもこうした人間領域から発する数の表示においても概して数と数えられるものとの間の相互関係が現れている。言語がつくり出す最初の数表示が、完全に定まった具体的計数動作に由来し、いわばその色合をまだ保持していることは、すでに一般的に示されている。この特徴的な色彩がきわめて明瞭

に認められるのは、数の設定が物の区別からではなく、人間の区別から出発するときである。というのは当初は、数は普遍妥当的な概念原理として、また無制限に継続しうる過程として出現するのではなくて、最初から一定の領域に制限されるからである。しかもその限界はただ客観的な直観によるだけではなく、より精密明瞭に知覚の純粹主観性によって表される。それゆえ「我」と「汝」、「汝」と「彼（女）」とが区別される。しかし「三人」の区別に対して与えられている、この明白な「三数」(Dreiheit)をこえて、さらにそれ以上の多に進むきっかけも必要も存在しない。こういう多が思考され、言語に表されるかぎり、人間領域の相互分離で刻印されるのと同じ「示差」的特徴をそれは有していない。むしろ「3」をこえれば、いわば無制限の領域がはじまる。これはそれ以上分割されない、ただの集合域である。実際我々は言語発達の随所で、最初の数構成がこうした制限に拘束されているのを見る。多くの自然民族の言語が示すところによると、「我」と「汝」の対立から展開される区別は「1」から「2」に進むこと、「3」がこの領域に加えられると、より重要な進歩になること、しかしこれ以上は数構成のもととなる分化力、つまり「示差」能力がいわば衰退することである。ブッシュマン族〔南アフリカ〕では数表現は本来「2」までしかない。「3」の表現は「多い」ということにほかならず、それから10までのすべての数は指を足して表される。²³⁾ またヴィクトリア地方〔東アフリカ〕の原住民族は「2」以上は、全く数詞を発達させていない。ニュー・ギニアのビナンデレ語では1, 2, 3の数詞しかなく、それ以上は別の言葉で云いかえて作らねばならない。²⁴⁾ 他の多くの例もつけ加えられるが、すべてこの場合に明らかになるのは、計数行為が本来「我、汝、彼（女）」に対する直観とどれほど緊密であって、きわめてゆっくりとそれから離れて行ったかということである。「3」という数がある民族の言語と思考で果す特別な役割は、ここにおいてその究極の説明を見出すように思われる。自然民族の数把握に関しては、各数はまだ独自の外面的形相 (Physiognomie), つまり一種の神秘的特質をもっていると一般に云われてきたが、これは特に「2」と「3」にあては

まる。この二つだけはいうならば、ある特別な精神的色調^{トーン}をもっている。だから等質的な数系列からは区別される。十分に発達した数組織を有する言語でも、1と2、また場合によっては1から3、あるいは1から4までの数の特別な位置は、形式上の用法からはっきりと認められる。セム諸語では1から2は形容詞、その他は抽象名詞で、数えられるものを複数属格の形に置くが、そのとき数えられるものとは反対の文法上の性になる。²⁵⁾ インド・イラン語派、バルト・スラヴ語派の諸言語およびギリシア語が立証するところによると、印欧祖語では1～4の数詞は変化するのに反し、5～19は無変化の形容詞として、それ以上は名詞として数えられるものの属格と共に用いられる。²⁶⁾ また双数のような文法形式は、他の品詞よりはずっと長い間、人称代名詞と結合された。ドイツ語の1および2人称の代名詞には、かなり後代まで双数が保存されていたが、上述のことがなければ、すべての語形変化からは消滅していたであろう。同様にスラヴ語の発展途上では、事物に関する双数は人間に関するそれよりも、ずっと早くから失われてしまった。²⁷⁾ また多くの言語では基本数詞の語源は、三つの人称の別をあらわす語との、こうした関係を示唆すると思われる。特に印欧語では「汝」と「2」には、共通の語根が立証されると考えられている。²⁸⁾ シェーラーはこのような関連性に立脚しつつ、ここにおいて我々は心理学、文法学および数学に共通な言語的基盤に立っているのではないか——つまり2という数詞の語根は、言語と思考のあらゆる可能性の根底にある「始源的二元論」(Urduanismus)にまで、さかのぼるのではないだろうかと推論する。²⁹⁾ というのは言語の可能性はフンボルトによれば、呼びかけと応答によって条件づけられ、「我」と「汝」との間に確立される緊張と分裂が、発話行為によって除去されるため、この行為は真に「二つの思考力を取りなすもの」(Vermittlung zwischen Denkkraft und Denkkraft)と考えられるからである。

言語のこのような思弁的解釈にもとづいて、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトはその『双数について』の論文で、³⁰⁾ それまで文法上はしばしば単なる無用の長物、言語の役立たずの技巧と見なされてきたこの形の用法を、内

的に解明することができた。彼は一方では主観的、他方では客観的な起源を——したがって半ば感性的、半ば知的な原義を双数に見出した。フンボルトによれば、「2数」(Zweiheit)を自然界で与えられた、感性的に把握できる最初の方向に言語は従い、随所で双数を純粹の事物直観の表象として、優先的に役立てるということである。この用法は殆んどすべての言語にまで及んでいる。対^{ついで}になって存在するものは言語意識には、種類上同じ全体に属する特殊なものとして表される。たとえばパンツ—諸語では、目、耳、肩、乳房、膝、足、手などのような一対のものは、特殊な類を形成し、特別な名詞接頭辞がその特徴となる。³¹⁾このような自然の2数のほかに、人為的なものもある。一対の手足のよう、ある種の道具は言語では特別扱いされる。しかし真の名詞概念を表す分野では、この双数の使用は大部分の言語の発展途中で、次第に後退してゆくことがわかる。セム語では双数は祖語にはあったが、個々の言語に分れると、徐々に消失しはじめた。ギリシア語では双数はすでに先史時代に諸方言で衰退し、ホメーロスでは解体の状態にある。ただアッティカ方言でのみ長く残ったが、紀元前4世紀には次第に消滅しつつあった。³²⁾この現象は特定の地域とか条件に限られるものではなく、普遍的な言語論理を明白に表している。双数の衰退は個数や具体的な数から、連続数へ次第に発達移行したと符合する。厳密に統一的な原理にしたがって構成された、全体としての数連続概念が強く成就されればそれだけ、個々の数は特殊な内容をあらわす代りに、価の等しい位置につくようになる。異質性は純粹の等質性に道をゆずりはじめる。しかしこの新しい視点が単なる事物の領域でよりも、人間の分野での方がずっと遅れて成就されるのがわかる。というのは人間の領域は、その起源と本質からすれば、異質のタイプに属するからである。「汝」は「我」と同じではなくて、「我にあらざるもの」として対立する。だから「2番目(のもの)」は1の単純な反復から生じるのではなくて、質的な「他のもの」として関係をもつ。なるほど「我」と「汝」は合流して、「我々」という共同体となるが、この「我々」となる合流の形では、集合的、事物的関係とは全く別の何かが問題となる。言語が発展させる

事物と、人間の複数概念との相違を、すでにヤーコプ・グリムは折にふれて次のように強調した——事物としての複数と同質要素の合計と見なされる。たとえば「人々」(Männer)は「人」(Mann)＋「人」(Mann)と定義されるのに反し、「我々」(Wir)は「我」(Ich)＋「我」(Ich)というよりはむしろ、「我」＋「汝」(Du)または「彼(女)」(Er/Sie)として解さねばならぬので、上述のような合計として表すことはできない。³³⁾したがってここでは、数構成の純粹に「配分的」動機、つまり単位に分解する動機は、時間現象の直覚から出発した計数のときよりも、はっきりと現れるのである。

「我々」という統一体にまとめて把握される要素を、ここで明示するだけでなく特定化しようとする同じ努力は、「三数」(Trial)や「包括複数」と「除外複数」の各用法に認められる。メラネシア諸語では双数と三数の用法は特別に規則化されていて、2人と3人の人間について言及するときは、それに応じた形が使われるように念入りに留意されている。話し手が「我々」の表示の中に自分を含むか、除外するかによって1人称代名詞の形が違ってくる。³⁴⁾またオーストラリア原住民の言語は、単数と複数の中に三数を導入するのが常であるが、これには話しかけられた人をふくむ形と、除外する形とがある。「私たち二人」は「あなたと私」、または「彼(女)と私」、そして「私たち三人」は「私とあなたと彼(女)」あるいは「私と彼(女)と彼(女)」をそれぞれ意味する。³⁵⁾この相違を複数表示の音形で表す言語が多い。たとえばデラウェア族[北アメリカ]の言語では、フンボルトによると、包括複数「私」と「あなた」を意味する代名詞の音声を加えて、また除外複数「私」という代名詞の音声を反復させて作られるということである。³⁶⁾等質的な数連続および数の直観の発達は、このような厳密な個別化の方法に限界を設ける。特定の個体の代りに、それらを同等に包括する種属が登場する。要素の質的な分割の代りに、手順と規則の等質性が現れる。そしてこれに従って諸要素は、量的な全体にまとめられるようになる。

言語が数表象と数詞構成で追求する手順の全体を概観するならば、純数学で通用している数構成の精密な方法から、その個別要素がまさに反意的に

(per antiphrasis) 導き出されるであろう。特にここで明らかになるのは、数の論理的、数的概念が現状に到達するまでには、いかにしてそれとは逆の対立関係から形成されねばならなかったかということである。数連続の論理的特質としてあげられるものは、その必然性と普遍妥当性、その独自性、その無限の連続可能性、およびその個々の構成要素の完全な等価性などである。³⁷⁾ しかしこれらの特徴のどれ一つとして、はじめて言語に表され、具体化される数構成の手順に歩み寄るものはない。ここには数連続の独自性すら全くない。我々がすでに見たように、どのような新しい数えられる対象も、根本的に新しい手がかり、つまり計数手段を必要とする。数の無限性については問題はない。直観的で表象に向いた対象の組合わせを、計数は明白な集合特徴をそなえた集群をこえて押し進める必要も可能性もない。同様に数えられるものが、何の質的な特性をもたぬままで、しかも無規定的な単位として、計数を受けることもない。しかしその代り、それは特殊な事物的、質的特徴を保持している。質的概念においては、段階的差異の形と連続に適した全体把握の形は、徐々にしか発達しないことがそれを示している。もし我々が文明語で発達した形容詞の比較変化 (Steigerung), すなわち原級, 比較級, 最上級の諸形を考察するならば、その根底にあるのは級変化で形が少し変わるだけの一般的な概念、つまり属性の特徴であることがわかるであろう。しかしそのような大部分の言語では、この量的規定の区別には、量的相違そのものを実質的な種属の区別とみなす別の方法が、はっきりと対立する。セム語や印欧諸語において、形容詞の比較変化で現れる補充法 (Suppletivism) の現象は、そうした把え方に対する言語上の道具である。たとえば印欧語圏では、善悪, 嫌悪, 多大, 微小などという質的概念は単一の語根からではなく、全く異ったものからできている——たとえばドイツ語の gut (良い), besser (より良い), best (最も良い), ラテン語の bonus, melior, optimus [意味は同前], ギリシア語の ἀγαθός, ἀμείνων, ἄριστος [同前] ほかに βελτίων 「より良い」と βέλτιστος 「最も良い」, そして κρείττων 「より強い, より良い」と κράτιστος 「最強の, 最良の」などのように。し

たがってこの現象は次のことに帰因するとされた。すなわち古い「個別化の」判断が、後代の「集群化の」見方にまだ明瞭に反映しているのではないかということ、換言すれば本来の「質的な言語形成」が、「量的な言語形成」へと次第に拡大しようとする傾向に対して、自己主張したのではないか、ということである。³⁸⁾ 等質的に考えられ、音声的に均等に表される属性概念は、やっとな段階的に区別されるのであるが、これが抽象化される代りに、ここに見られるのは根本的な直観である。属性の各「度合」には、かけ替えのない固有の特質がまだそのまま残っている。したがってそれを単なる「より多い」とか「より少ない」という具合にではなく、分離されたもの、または「別のもの」と見なすのである。形容詞の比較変化を一般に発達させていない言語では、この見方はまだはっきりと現れる。我々が「比較級」とか「最上級」として習慣的に表しているものが、全く存在しない言語は非常に多い。この場合、程度の区別は迂言法によって、間接的にしか表現できない。すなわち「越える」、「勝る」^{まさ}などのような動詞表現が代用されるか、また比較せねばならぬ二つの事項が、並列文 (Paratax) の形に置かれるといった具合である。³⁹⁾ またある事物が他と比べて、あるいは他に「対して」大きいとか、美しいとかを表す形容詞の小辞も使われる。⁴⁰⁾ この種の多くの小辞には、もともと空間的な意味があった。そのため質的な段階的差異が、高低、上下などのような空間関係にもとづいて、そこから出発したように思われる。⁴¹⁾ したがって抽象的、論理的思考が、純粹関係概念を必要とするように見えるときは、言語的思考は空間的直観を働かせることになる。このようにして、我々の考察の環は閉じられて完了する。改めてわかることは、空間、時間および数の諸概念は、言語に築かれる客観的直観の固有な骨組を構成するということである。諸概念はまさに次のような理由で、その課題を達成することができる——それらは全体構造からすると、理念的な中心にふくまれる、すなわち感性的表現の形式に徹底的に固着してこそ、感性的なもの自体をますます知的内容で満たし、これを知的なものの象徴にするからである。

原著者の註

- 1) Natorp, Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften, S.98 f
- 2) Westermann, Ewe-Grammatik, S.80
- 3) Reinisch, Nuba-Sprache, S.36f.
- 4) von den Steinen, Unter den Naturvölkern Zentral-Brasiliens, S.84ff
- 5) Meinhof, Bantu-Grammatik, S.58
- 6) Powell, Evolution of Language, I, p.21 ; Gatschet, Klamath Language, p.532f.
- 7) Steinthal, Mande-Negersprachen, S.75f.
- 8) Dobritzhoffer, Historia de Abipones(Wien 1784)
- 9) von der Gabelentz, Die melanesischen Sprachen, S.23 ; Codrington, Melanesian Languages, p.241
- 10) Powell, Introduction to the Study of Indian Languages, p.25
- 11) Codrington, Melanesian Languages, p.148 ; von der Gabelentz, Melanesische Sprachen, S.23
- 12) Müller, Novara-Reise, S.274ff.
- 13) Codrington, op.cit., p.148f. ; von der Gabelentz, op.cit., S.23,255
- 14) Boethlingk, Sprache der Jakuten, S.340f. ; Winkler, Der Ural-altaische Sprachstamm, S.137
- 15) Brugmann, Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen, S.413 ; Griechische Grammatik, S.369f.
- 16) W. von Humboldt, Über den Dualis, S.20
- 17) Gatschet, op. cit., p.419,464,611
- 18) Goddard, Athabascan(Hupa)(Boas, Handbook of American Indian Languages, I, 404)
- 19) Meinhof, Die Sprachen der Hamiten, S.25
- 20) Bücher, Arbeit und Rhythmus
- 21) Boas, Handbook, I, p.683ff. ; Codrington, op.cit., p.110
- 22) Boethlingk, op.cit., S.340
- 23) Müller, Grundriß, I, S.2, 26f.
- 24) Sayce, Introduction to the Science of Language, I, p.412
- 25) Brockelmann, Grundriß, I, S.484ff. , II, S.273ff.

- 26) Meillet, Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes, p.409ff. ; Brugmann, op. cit., S.369ff.
- 27) Miklosich, Vergleichende Grammatik der slawischen Sprachen, IV, S.40
- 28) Benfey, Das indogermanische Thema des Zahlworts 'zwei' ist du (Göttingen 1876)
- 29) Scherer, Zur Geschichte der deutschen Sprache, S.308ff., S.355
- 30) Humboldt, op.cit.
- 31) Meinhof, Bantu-Grammatik, S.8f
- 32) Brugmann, Griechische Grammatik, S.371
- 33) J.Grimm, Kleinere Schriften III, S.239ff.
- 34) Codrington, op. cit., p.111f.
- 35) Matthews, Aboriginal Languages of Victoria(Journal and Proceedings of the Royal Society of New South Wales, XXXVI, p.72)
- 36) Humboldt, Kawi-Werk, II, S.39
- 37) Lipps, Untersuchungen über die Grundlagen der Mathematik (Wundt, Philosophische Studien, IX—XI, XIV)
- 38) Osthoff, Vom Suppletivwesen der indogermanischen Sprachen, S.49ff.
- 39) Roehl, Schambala-Grammatik, S.25
- 40) Migeod, The Mende Language, p.65f.
- 41) Brugmann, Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen, S.321ff.